

2018 3/27

No.2063

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—



箱根町仙石原の「仙石原すすき草原」で15日、恒例の山焼きがあった。好天の下で、観光客らは燃え広がる炎を見つめながら春の訪れを感じた。



政経かながわ

2018 3/27 No.2063

contents

視点・点描	3
チケットに刻む街の表情	
まつりごと点描	4
安倍政権が大失態 森友文書改ざん解明を	
千の風～追想	6
時流に抗いながら 作家・石牟礼道子さん	
企業最前線	8
活気づく共用オフィス 需要狙い米企業も「上陸」	
くらし2018	10
その息切れは年のせい？	
広告珍談	12
広告はたのしい⑯ フネのガレージ	
NNAアジア経済リポート	13
神奈川景気データファイル	14
神奈川景気データファイル	15

事務局だより

◇2018年4月定例講演会

2018年4月11日（水）

午後1時30分～3時

ホテルモントレ横浜3階「ビクトリア」

講師は城南信用金庫元理事長・顧問の吉原毅さん

演題は「原発ゼロで日本経済は再生する」

視点



チケットに刻む街の表情

20年前の3月に開場した日産スタジアムに新たな肩書きが加わる。2020年8月8日、東京五輪男子サッカーの決勝を開催する

が初出場した年でもある。代表を追いかけてフランス国内を巡つたのは忘れられない思い出だ。

あのときの日本のメンバーには井原、川口、小村、城（以上横浜マリノス）、山口、檜崎（以上横浜フリューゲルス）、中田、呂比須、小島（以上ベルマーレ平塚）と神

実はこのコラムで書いていない情けない話がある。
同大会で国際サッカー連盟公式取材パスが取れなかつたメディアは、日本協会の斡旋で日本戦のチケットを購入し、一般客と同じ席ト1枚の重みを痛感させられた。

W杯観戦は旅であり、試合と街の風景がセットで記憶に残る。東京五輪では野球・ソフトボールも主会場が横浜スタジアム。世界から集う観客は、1枚のチケットに試合とセットにどんな横浜の表情を焼き付けるのだろうか。

到着してみると、日本戦チケツトの大騒動が勃発した。手に入ら

（神奈川新聞社整理部長
岡部 伸康）

結局は3連敗に終わつたが、接戦の連続で感動を誘つた。自分としては初の大舞台に挑んだ日本代表レポートに気合を入れたが、旅の道中をつづったコラムの方がはるかに反響があつた。

約3週間、記者仲間がデジカメを置き引きされてその犯人を追い掛けた話や、先頃亡くなつた三つ星シェフのレストランで食事した話、代表合宿地で競馬やゴルフに（ネタ作りのために無理して？）出掛けた話などを連日書いた。

ぬまま現地に乗り込み、夜行列車

内や初戦会場のトゥールーズ市内で、チケットを求めて歩き回る日本サポーターも大勢見かけた。

そんな異様な雰囲気の中、川の

中州に浮かぶ競技場の入口に着いてバッグの中を見ると、あるはずのところにチケットがない。橋のたもとで自分は何をしにここへ来たのかと血の気を失つたが、中身をよくよく見ると、入れていなければずのところにあつた。ただの自作自演の紛失劇なのだが、チケット

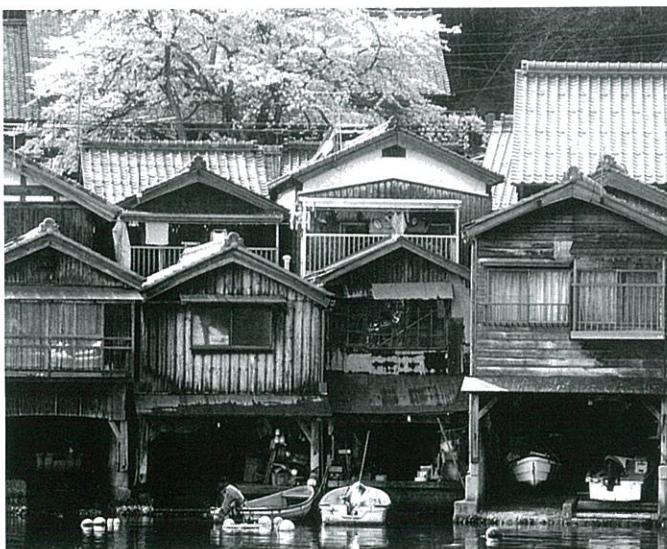
フネのガレージ

クルマをガレージに入れて、そ
の上に住まっている人は多いと思
う。ところがクルマではなく、「フ
ネを入れるガレージ」がある。フ
ネだから道路ではなく、「海」か
ら引き入れるのである。そのガ
レージを、「舟屋」という。

冬。海が荒れる日本海沿岸には、
漁船や船具を納めておく「船小屋」
はあるが、ヒトが住む建物のなか
に、フネを収藏する例はほかにな
い、と思う。

「舟屋」は日本三景のひとつ、
天の橋立の近く、丹後半島（京都
府与謝郡伊根町）にある。伊根
湾を取りかこむようにならび立
つ、230軒ほどの集落。海沿い
の家々に、フネのガレージがある。
うしろに山がせまつて考えだされ
た、漁民たちのアイデアである。

『乙姫からの便り』と
町役場が発行した



フネは海にむかって斜めになつ
た地面、「舟揚場」に引き上げる。
エンジン付きの漁船と、手こぎの
小舟、2艘を入れることができる。
もちろんフネを、長持ちできるこ
とはいうまでもない。

ガレージは物置で
もあり、漁具の手入
れや魚を干物にする、ゆとりあるス
ペース。ガレージを
1階とすれば、2階
は6畳ほどの居間が
ふたつ。目の前に海
が広がっている。せ
まい小道をへだて
て、山側に母屋があ
る。この図は、伊根

題された、観光パンフレットから
引用した。そう、伊根町は「乙姫
さま」とも古い関わりがあるとい
う。

乙姫さまは、むかし話「浦島太
郎」に登場する、龍宮城の美しい
お姫さま。浦島伝説は横浜をはじ
め、各地にあるが、もつとも古い
のは、伊根らしい。「浦嶋神社」

には、乙姫さまから太郎がもらつ
こうに仙人がいて、不老不死のク
スリをつくっています。童子をつ
れて、そのクスリを求めてきま
しょう」と徐福が進言した。皇帝
はよろこんで、3千人の童男童女
と、五穀の種などを支給して、船
出させた。仙薬を入手できたのだ
ろう徐福は、この地を気に入り伊
根に住みついた。医や薬を人びと
に教え、天文を占い、したわれた
という。

（美術工ッセイスト、茅ヶ崎市在住）
（図）伊根町役場発行『乙姫からの
便り』より、「舟屋」

てきた、玉手箱もあるそうだ。
もうひとつ、この町には「徐
福」伝説がある。はるか2200
年前のこと、日本は弥生時代の初
期。神武天皇から数えて、7番目
の考靈天皇の御世である。中国は
春秋戦国を統一した、秦の始皇
帝。兵馬俑で知られる、最初の皇
帝である。